# 野心的な資料集

萩野　脩二

内田慶市編著
漢訳イソップ集
文化交渉と言語接触研究・資料叢刊3

B5判　610頁
ユニウス
［本体6000円＋税］

序　　松浦章
はじめに
影印収録資料一覧
イソップ東漸―中国語イソップ翻訳史―
『況義』四種
『意拾喩言』系統（九種）
『意拾喩言』からの脱却（四種）
方言訳（四種）
中国風イソップ（一種）

イソップの話は、きわめて興を引く話として我々にも普段に身についている。書評子の経験では、しかし、イソップの話は学校教育の教科書にはなかったような気がするが、それにもかかわらず幾つかの話を知っている。なぜなのだろうか。

この本は、内田慶市教授の野心のある本である。内田教授は、ここで「イソップ物語」の中国語訳（＝漢訳）の系譜を並べる。ただそれだけの資料集が、時系列に並べられると、不思議なことにある狙いが浮上する。そういう狙いを内田教授の野心と言うのであるが、野心が成果として定着したことをこの本は実証しているのである。それがわからなければ、資料集なんて面白くはない。

そのことを懇切丁寧に解説しているのが、本書に付せられた内田教授自身による「イソップ東漸――中国語イソップ翻訳史」という四〇ページほどの論文である。今、この論文に基づいて私の感想を述べよう。

その前に、この本の「もくじ」を書いておこう。



欲張りの犬やカラス、兎や狐などの擬人化、異国の人間などの活躍は、日本の昔話とは違ったシチュエーションであるのに、我々は話としての教訓を早くから受け入れているではないか。そして、少なくとも書評子は、それらの話を日常に溢れた教訓の話とは思っても、西洋の文化の東漸とは思っていなかった。

だが、内田教授の慧眼は、吉田松陰が見た「イソップ」が『上海施医院蔵板』であったことを指摘する。こうして、上海版『伊娑菩喩言』が安政四（一八五七）年までに日本に伝えられたことを実証する。今、これらのことに関しては、専門家がいるであろうから多くを語らない。

問題は、その上海版『伊娑菩喩言』が、メドハースト（W.H.Medhurst）の関わりによって、もともとの名称『意拾喩言』が変えられたものであることを実証する。たとえば次のようにである。

☆「意拾」は広東語では［isep］であるが、上海語には広東語のような完全な入声はなくなっている。［Aesop］の［p］を表わすのに「菩」という漢字を付け加えて「伊娑菩［isopu］」とするのは広東語系ではないと考えるのである。その意味では、Medhurstは彼の英華字典を見ても、たとえば、「雄鶏」「雌鶏」「雄猪」のように「修飾語－被修飾語」という「非広東語」型の語彙をLobscheidなど他の広東語系の字典よりも多く収録する傾向がみられるのである（三一頁）。

このような語学的な確かな見解に基づく論証であれば、なるほどと首肯せざるを得ないではないか。では、その『意拾喩言』とは何か？

そもそも「イソップ」が中国にもたらされたのは、カトリックの宣教師たちによってであった。

内田教授は、宣教師たちが『聖書』を訳すことは当然の行為として、西洋文化を体現する副次的な産物に目を付けた。それは、地図でも、時計でもよかったのだ。それが「イソップ物語」だった。なぜなら、これは古く一七世紀初めに明国にやって来たマテオ・リッチ（Matteo Ricci）がフランドル地方で印刷された「イソップ物語」を中国の役人に贈呈した記事があるからだ。強調しておきたいのは、こういうありふれたなんでもない資料を見る目の付け所だ。こういう勘が研究を支えることを、そして、その勘を勘だけで終わらせない追求の持続性の必要を内田教授は実践したと言ってよい。

内田教授は言う、「イソップの東漸はマテオ・リッチから始まる」と。本当にそうか？

そうであることを実証することが研究の第一歩なのであ

る。「現在までのところ、イソップの中国語訳としてはマテオ・リッチの『畸人十篇』に採られた数編が最も初期のものと認められる」（五～六頁）そして、パントーハ（D.de Pantoja）の『七克』や、トリゴー（N.Trigault）の『況義』などが紹介される。『況義』の存在に最初に注目し詳述したのは、新村出博士だそうで、内田教授はそれを引用するが、新村博士の至らない点も補充する。それは自らパリ国立図書館で見た成果である。自らの実地における検分こそ研究の基本であることを我々に教える。

なお、細かいことだが、書評子の見たところ、この箇所では（九頁）、内田教授は『況義』を『況義』としたり、「……南国張賡筆傳」を「筆述」とするなど、やや慎重さに欠けていることを指摘しておこう。

『況義』の検討を経て、内田教授は、「こうしてみると、『況義』はトリゴー個人の手によるものではなくて、宣教師たちの共同訳であった可能性が高い」（一二頁）と貴重な指摘をしている。

一九世紀に入ると、プロテスタント宣教師が中国にやってきて、「イソップ」の「啓蒙」も行われたが、カトリック宣教師のものに比べていくらか「平易」であり、「白話」により傾いていることを指摘する。

そして、「中国語訳イソップの流れの中で、その量、中国語の質、普及の度合いと中国および日本への影響等々、いずれの面でも他を凌駕しているのが、ロバート・トーム（Robert Thom）の『意拾喩言』である。」（一四～一五頁）。

このロバート・トームの発掘と評価が、この本のハイライトであり、内田教授が最も力を入れた点でもある。三九歳で夭折したトームへの内田教授の思い入れは、トームの外交官としての業績や白話小説の翻訳や通事としての貢献などにも言及する。だから、高杉晋作が購入した『華英通用雑話上巻』などもトームの作であることを指摘することを忘れない。

内田教授の重要な指摘はまだある。それは、次の点にある。

☆『意拾喩言』の「最大の特徴は原話にとらわれずに、思い切った「中国化」を試みている点にある。つまり、時間や場所の設定、モラルを「極めて中国的」に変えたのである」（一九頁）。

☆また、トームは「宣教師ではなかったし、この『意拾喩言』はいわゆる「外国人が中国語を学ぶためのテキスト」として編纂されたものであった。しかしながら、ある意味では宣教師以上にイエズス会の「適応主義」、さらにはモリソンの翻訳観を具現化したもの、つまり「限りない中国文化への同化」を意識していたと言えよう。



／モリソンの翻訳観とは、「いわゆる翻訳とは、単なる語彙の置き換えではなく、あくまでも相手方の思考や文明に身を置くという立場」である」（二一頁）。

トームの「イソップ」の漢訳が、単に言葉の翻訳だけではなく、中国文化への同化を意識していたがゆえに、文化の東漸の一つの形を取ったものであることが、ここで指摘されているのである。

ここで、内田教授のモリソンの翻訳観の説明すなわち内田教授の思考を表す言葉を引用しよう。

☆「言語」とは「人の表現」の一つであり、「対象－認識－表現」という過程的な構造を持っている。その成立の基盤として「話者（表現者）」すなわち「人間」の存在は不可欠である。このような言語観に立った時、ある言語の「語彙」は、その言語を使用する民族、種族の、ある対象に対しての共通の「認識の集合」と考えられる。言い換えれば、言語はその使用する民族や種族の「歴史」「思惟」といった「文化」を反映したものである。「文から切離された単語の定義だけで、ことばの意味を伝えることはできない」「辞書に言語はない」というのは、まさにそのような言語観に基づく「文化移入」「文化受容」の態度であると言うことができる。従って、「翻訳」に求められるのも、いわゆる「語彙の equality」ではなく、目に見えない「認識（あるいは価値）の equality」ということになり、ここで「言語の翻訳」とは、「文化の翻訳」ということになるわけである」（二一～二二頁）。

ここにおいて、イソップの翻訳という事象が文化交渉その


**中国年鑑2014**

◎5月末刊行◎

中国研究所　編・発行

毎日新聞社　発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5判　約500頁

価格：18,000円＋税

◆特集＝見えてきた「中国の夢」――習近平政権の1年

米国と“新型大国関係”を構築し、“中国の夢”実現にむかって着々と前進しながらも、格差縮小・民族問題等、課題山積する習近平体制下の中国。“李コノミクス”や習近平政権の外交についても解説。

◆動向

政治、華人社会、対外関係、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2013年日誌ほか

※お問い合わせ・ご予約は中国研究所事務局まで

一般社団法人　中国研究所

〒112－0012

東京都文京区大塚6-22-18

TEL：03-3947-8029

FAX：03-3947-8039

e-mail:c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL:http://www.chuken1946.or.jp

ものであることが実証されていると言える。異文化接触で最も重要なことが、単にその言語を習得することに止まらず、お互いの文化の違いを認識しながら、相手方の文化を認めることだという、内田教授の野心が見事に実現されたではないか。

その後、内田教授は、「イソップ物語」の漢訳が、広東語を以ってなされたこと、また、宣教師の活躍の範囲の拡大につれて、南京や上海の言葉で漢訳されたことを跡付ける。広い中国であるから、どこの地域の言葉で訳されたかは重大なことである。この言葉の理解に関しては、言語を主たる研究とする内田教授はうってつけであった。ただ、往々にして、このことは言葉の時代的地域的関心で終わってしまいがちである。言語学者ならば当然のことかもしれない。内田教授はそれをひとつ乗り越えて、翻訳観を芯に据えた。ゆえに、野心的狙いと言ったのだ。言語は単に言葉の表象だけではない。

二二種の資料は、イギリスのBritish Library、Oxford University Bodleian Library、フランスのBibliotheque Nationale、オーストラリアのAustralia National Library、中国の上海図書館、香港大学図書館、そして日本の国立国会図書館、東洋文庫、東京都中央図書館諸橋文庫、関西大学図書館増田文庫などから収録されている。本人の架蔵六種と所在不明一種があるが、この収集のために東奔西走したことがわかる。個人的には、内田教授が資料収集の時に見聞したイタリアの広場での鐘の音や、大英博物館の冷気や、ドイツでのラザーニャの味や街並みの傾斜などが、この資料の背後に隠されていることが推測される。この無機質な資料の羅列を見るにつけ、背後に隠されている宣教師たちの血肉とそれを発掘する内田教授の執着とを思う。こういう所に、基礎的な資料の収集と公開の持つ学問的価値が生ずるのだろう。そのことを思うと、こういう地道な資料集があってこそ、文化交渉という大きな野心が達成されるのだと思い、野心の成果に喜びを感ぜざるを得ない。

きっとこの本は、文化交渉学を目指す者にとって、基礎的で有意義な本となるであろう。

（はぎの・しゅうじ　関西大学名誉教授）



## Book

**■雲南道教碑刻輯録**

本書における道教碑刻蒐集は、文献からの調査・収集と現地での捜索・考察の両面から行われ、文献は、元大徳年間以来七〇〇年以上にわたり雲南で纂修された省、府、州、庁、県地方志三四〇余種をはじめ、雲南省図書館、博物館所蔵の碑刻拓本や、一九八八年以降新たに纂修された省志八〇余種と一二〇種以上の県新志、各地政協が集めた文史資料が含まれる。現地においては、文献や関係者から得た情報に基づき、有名な道教宮観から郷村の廟所まで、雲南省全域（昆明、曲靖、玉溪、紅河、大理、楚雄、保山、臨滄、徳宏、普洱等州市の三〇数県）で碑刻実物の捜索と考察を実施した。確認できた実物は採寸及び保存状況、環境などを記録し、デジタル撮影を行っている。

［蕭霽虹　中国社会科学　五、九四〇円］

**■紅色檔案：延安時期文献檔案匯編**（第一回全六〇巻）

本書は、延安革命根拠地当時の政治、経済、軍事、文化、教育等多方面の貴重な文献檔案資料を入手可能な限り網羅した大型叢書で、期刊、図書、個人の日記筆記、組織の檔案資料等、多岐にわたる。本編は期刊の『解放』『共産党人』『八路軍軍政雑誌』『中国婦女』『中国工人』『中国青年』『中国文化』『大衆習作』『文芸月報』『谷雨』『群衆文芸』『文芸突撃』『文芸戦線』『大衆文芸』『草葉・新詩歌・中国文芸』『魯迅研究月刊』、図書の『五月的延安』『陝甘寧辺区実録』『整風文献』『速写陝北九十九』、檔案の『陝甘寧辺区参議会資料匯編』『陝甘寧辺区政府文件選編』が収録されている。

［陝西人民出版社　九九六、〇〇〇円］

**■貞元六書**（全二冊）

「貞元」は、『易経・乾卦』の「元亨利貞」に基づき、天道人事の循環が永遠に終息しないことを意味する。本書は、馮友蘭が一九三七年から一九四六年までに著述した『新理学』『新事論』『新世訓』『新原人』『新原道』『新知言』を収録する。いずれも馮友蘭の新理学体系の完成を示す代表作である。

［馮友蘭著　中華書局　六、六〇〇円］

**■経学研究論著目録**（一九九八－二〇〇四）（全四冊）

同『目録』の第四編である本書は、一九九八年から二〇〇四年に刊行された経学研究の専門著作・雑誌・新聞・論文集・博士硕士論文・学術会議論文など二三、六八二種を紹介する。巻末には、収録新聞・雑誌・論文集・辞書・データベースの一覧表及び作者索引を付す。

［漢学研究中心　一二、八〇〇円］

**■朱剣心遺文存稿**（全二冊）

本書は、金石学者朱剣心が残した著述原稿を網羅的に収載する。上巻『論学雑著』は、書法四論・中国人名之繁称・中国金石著録法・『蘭亭』真偽弁―敬向郭老質疑・『蘭亭』真偽弁之二―敬向竜潜、啓功、于碩、阿英和徐森玉諸先生質疑・罪言―一個中学国文教員自述・文字国・女人頌・武則天・董小宛与冒辟疆など、下巻『詩詞書印』は、自題詩稿四種・浮生夢痕・夢

# 東方

Eastern Book Review

402

2014 | 8 August

昭和五八年一〇月一二日第三種郵便物認可
平成二六年八月五日発行
（毎月一回五日発行）第四〇二号

【東方】第四〇二号　二〇一四年八月
昭和五八年一〇月一二日第三種郵便物認可
平成二六年八月五日発行（毎月一回五日発行）

発行人＝山田真史　印刷所＝株式会社テンプリント
発行所＝株式会社東方書店　〒101-0051東京都千代田区神田神保町一の三
電話〇三（三二九四）一〇〇一

定価＝一一〇円（本体一〇二円）（一年分一、〇〇〇円送料・税共）
©2014 東方書店
掲載記事の無断転載をお断りいたします

❖レポート
日本・中国・韓国　河川船曳歌―難所を越える―
真鍋　昌弘
＊
西洋トランプと中国式カードゲーム
大谷　通順

❖書評
九層の台も累土より起こる――『柳宗元集』の新定本登場か
『柳宗元集校注全一〇冊　中国古典文学基本叢書』
戸崎　哲彦
＊
中国人はエジソンか
『身体を躾ける政治――中国国民党の新生活運動』
飯島　渉
＊
野心的な資料集
『漢訳イソップ集　文化交渉と言語接触研究・資料叢刊3』
萩野　脩二

❖今読みたい同時代中国の作家たち
徐則臣――ひとに共感し寄り添う実力派作家
和田　知久

ISSN　0910―8904

中国21

愛知大学現代中国学会編
東方書店発売
A5判
各冊2000円（税別）

変動する現代中国の行方を、世紀を越えてアジアの視点から論ずる

Vol.40 中国社会の矛盾と展望
2014年3月刊 978-4-497-21407-2

Vol.39 ナショナリズムと歴史認識
2014年1月刊 978-4-497-21401-0

Vol.38 中国の産業競争力
2013年3月刊 978-4-497-21305-1

Vol.37 中国水利史
2012年12月刊 978-4-497-21230-6

Vol.36 台湾 走向世界・走向中国
2012年3月刊 978-4-497-21212-2

Vol.35 中国法の諸相
2011年11月刊 978-4-497-21116-3

Vol.34 国家・開発・民族
2011年2月刊 978-4-497-21101-9

Vol.33 留学という文化
2010年7月刊 978-4-497-21012-8

Vol.32 辞書のゆくえ
2009年12月刊 978-4-497-20914-6

Vol.31 帝国の周辺 対日協力政権・植民地・同盟国
2009年5月刊 978-4-497-20908-5

東方書店 http://www.toho-shoten.co.jp/
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3　TEL03-3294-1001／FAX03-3294-1003

東方書店